

『念仏三昧宝王論』の撰述背景

——飛錫遺文を手がかりに——

加藤弘孝

はじめに

唐代中期の学僧、飛錫（生没年不詳）が撰した『念仏三昧宝王論』（通称『宝王論』）には、多層的な仏教思想が展開されている。その撰述期は、中国思想史上の転換期である安史の乱以降だと考えられ、長安の仏教界が存在感を強めていた時期と重なっている。このような背景を鑑みた場合、『宝王論』に時代性の痕跡を見出し、それを撰述動機の問題と関連付けていくことが、思想研究の初動において適切な方法論であるのは言を俟たない。

飛錫は長らく中央にあつて各学派の領袖と懇意にしており、それら交遊の過程で生成された碑文等の遺文資料からは、飛錫がその身を置いていた撰述時の仏教界の情勢を窺うことができる。そこで、まずは飛錫撰述の碑文や上表文などの遺文資料に対する整理作業をおこなってみたいと思う。

一 飛錫遺文

本章では遺文類の分類作業を取り扱う。主に現存する碑文、上表文の類を遺文として処理し、散逸文献を準遺文として分類する。まず現存文献に関して遺文名を挙げれば左記のごとくである。①『千福寺楚金禪師碑』、②『大広智三蔵和上之碑』、③『不空三蔵和上影賛』一首、④『如願律師墓誌銘』、⑤『賀晴表』一首、⑥『謝恩表』（擬題）一首。

現存文献は、碑文、影賛、上表文などで構成されている。①以外は太暦年間（七六六―七七九）以降の成立である。なお⑥の成立過程は後述の『続開元録』巻中に詳しい。

次に散逸文献は、飛錫の手によって成立し、今では逸書となっているものが該当する。①『誓往生浄土文』一卷、②『無上深妙禪門伝集法宝』一卷、③『念仏五更讃』一卷、④『往生浄土伝』五巻、⑤『西方讃文』一卷、⑥『唐僧本行詩』、⑦『紫閣山大莫碑』一卷、⑧『南陽慧忠国師碑』（擬題）、⑨『千

福寺西塔院北廊堂内影贊』一首（擬題）。

散逸文献は浄土教系と思しき著作群と碑文、影贊などから成り立っている。成立期（代宗期）が比定できるのは、③⑧である。なお⑧は、『祖庭事苑』巻一の引用（語句註釈）によつて、本文と銘文の一部分を復元することができる。また⑨は慧思（五一五—五七七）と智顗（五三八—五九七）への影贊と考えられる。以上、成立年代を推定できる飛錫遺文の大半が大暦年間のものである点には注目させられる。遺文資料が出揃ったところで、これらを『宝王論』と関連させることにどのような研究意義が見出せるか、次章以降で考察する。

二 代宗期における長安仏教界

『宝王論』の撰述は大暦九年（七七四）以降の成立と考えられる（『浄土教典籍目録』一二七—一二八頁）。これは唐王朝を土台から揺らがした安史の乱が終息して、さほど遠くない時期のことであり、飛錫の信仰生活、延いては思想形成にも何らかの影響を与えている可能性がある。そこで飛錫が活動した長安において、当時の仏教界の動向がいかなるものであったのかを考察してみよう。

唐代中期の仏教思想及び『宝王論』の時代性に関する問題を取り扱うに際して、欠かすことのできない研究は、塚本善隆の『唐中期の浄土教』（東方文化学院京都研究所、一九三三年）

『念仏三昧宝王論』の撰述背景（加藤）

である。塚本善隆は、『宝王論』と種々の遺文資料を用いながら唐中期の仏教の特質に言及し、「飛錫は彼の時代に長安に行われし各仏教の全てを認容せる総合協調の仏教を説き、弥陀念仏往生浄土教を説けるものと云うべきである。（…中略…）大暦、貞元の長安仏教の指導的地位にありし飛錫の念仏教が、かかる各教の総合融合の念仏教なりしことは注目すべきことである」（三三四頁）と、統合仏教の上に浄土信仰が形成されていたと結論づけている。なお安史の乱以降、政治、経済の中心が中原から地方に分散したことなどの諸事情で、各地に新たな禅宗諸派が次々に勃興したと言われている。これは動乱によって仏教思想が多分化した顕著な事例であり、中央と地方という観点で同時代の仏教思想を俯瞰した場合、塚本善隆の統合仏教説が持つ意義は多大なものがあると思われる。ただ飛錫の活動年代が大暦年間を下限とすることからみても、貞元年間（七八五—八〇五）をも調和思想の大勢に含める点に関しては修正する必要があるだろう。

大暦年間すなわち代宗期の仏教を代表するのは不空教団が実施した護国思想に基づく一連の事業である。訳経活動及び目録編纂、五台山信仰宣揚、内道場儀礼などの諸事業は王朝による圧倒的な仏教優位の宗教政策を背景にしていた。遺文資料を参照すると、これらの仏教事業の周辺には飛錫の存在があり、不空（七〇五—七七四）の寂後には仏教界の領袖の一

『念仏三昧宝王論』の撰述背景（加藤）

人になったと考えられる。更には飛錫が碑文をなした慧忠（七七五）、楚金（六九八―七五九）、如願（七七五）など各学派の高僧たちとの交遊関係も考慮すべきである。

以上、飛錫が代宗期の長安仏教界の中枢にあつて多彩な活動をしていたこと、また代宗期の長安仏教界には他の宗教を凌ぐ支持基盤があり、仏教思想を再統合する意向を有していたことなどを確認した。次章では、これらの考察を念頭に置きながら、具体的に『宝王論』の撰述背景の問題に踏み込んでいきたい。

三 『念仏三昧宝王論』と儀礼仏教

この問題の解明には、『続開元録』巻中に、円照（生没年不詳）主導の『勅定四分律疏』十巻撰述に関連して、飛錫が「転経礼懺六時行道」の法要を司つたとあるのが糸口になる。塚本善隆によれば官製の法要として智昇（生没年不詳）編『集諸経礼懺儀』巻下所収の『六時礼讃偈』が採用されていた可能性が高いという（前掲書一八五―一八八頁）。「転経」とあることから『往生礼讃』だけではなく『法事讃』を用いていた可能性も残されるが、『宝王論』巻中には、実際に飛錫が善導の著作を見ていたと思しき一文が存在するのである。

對曰梵云般舟、此云現前、謂思惟不已、佛現定中。凡九十日常行道者、助般舟之緣、非正釋其義也（『嘉興藏版』十丁表）。

上記の文では、般舟とは現前のことであり、思惟を止めなければ禪定中に見仏できると述べ、更には「凡九十日常行道」はあくまでも般舟を助ける縁であつて、それを般舟の意と見なすのは、正しく義を解釈していないことになる主張している。「凡九十日常行道」を般舟の意で理解するというのは、『般舟讃』の次の様な一文を指すと考えられる。

答曰。梵語名般舟。此翻名常行道。或七日九十日身行無間總名。三業無間故名般舟也（『専修寺本』、『誓願寺本』を参照）。

ここでは、般舟の義を「七日九十日」の「常行道」としており、飛錫がこの一文を註釈していたことが裏付けられる。飛錫が「凡九十日」と述べるのは、七日から九十日というニュアンスを含ませる意図があつたと考えられよう。ここに至つて飛錫が儀礼執行の際に、種々の儀礼書に基づいて検校していた可能性が浮上してきたが、この結果を受けて、大いに注目すべきなのは、儀礼と密接する主題を取り扱う文脈の中で、その理論武装に密教が用いられている点である。すなわち『宝王論』巻下に、

涅槃云乃至獻一華、則生不動國。是則一香、一華、一燈、一樂、及以飲食、盡心樂得奉薦三世諸佛者、淨土妙因、成聖元始、安得輕易其事而不遵之哉。若離於此行、而聽無稽之言、獻心華、點心燈、焚心香、禮心佛、而欲求於正覺者、亦何異騁猿猴之巧、守梅林之望歟。（…中略…）眞言門中瑜伽觀行、亦約事門表相、不一向推心、常嚴薦香華六時無廢也（『嘉興藏版』十丁裏―十一丁表）。

と記されるのがそれである。これについて塚本善隆は、「不空門下と共に不空の訳場に活動せし飛錫の思想に、密教の事相儀軌法要が認容されていることを示すものである」（前掲書三一二頁）と述べている。「一香、一華、一灯、一楽、及以飲食」などの仏前供養は、事相を尊ぶ密教において、当然のごとく重要な要素であり、塚本善隆の説は説得力を持つ。

この文脈で最も実用の可能性の高い経軌を推定すると、『宝王論』撰述時期に近接する大暦八年（七七三）訳出の『法華儀軌』一卷が挙げられる。同書には、

若修行者爲求六根清淨。滿足六千功德。成就法花三昧。現世入初地。決定求證無上菩提者。應一七日三七日乃至七七或三箇月。應依儀軌隨其力分（『房山石經本』三四四下）。

とあって、「法華三昧」の用語や「応一七日三七日乃至七七或三箇月」の期間など飛錫の思想との関連が窺えるのである。ところで大谷光照によれば、唐代仏教において、儀礼概念は学派を問わず共有されていたという（『唐代の仏教儀礼』有光社、一九三七年、八頁）。このような背景を考慮すると、統合の機運が高まった時代に、長安で行われていた儀礼仏教が調和の端緒を開く役割を果たしたということは容易に想定できる。ここに飛錫における調和思想構築の土壌を見ることができよう。

おわりに

以上、飛錫の遺文類を手がかりに『宝王論』の撰述背景を考察してきた。一連の作業の過程で見えてきたのは、『宝王論』撰述が時代的な要請に基づいていたということである。長安仏教界は繁栄を謳歌していた玄宗期に突如として勃発した安史の乱で分散化するという事態に見舞われたが、代宗期に実施された中央主導の統合政策を背景に、空前の復興を遂げることになった。晩年、長安仏教界の領袖の一人となった飛錫が撰述した『宝王論』に、このような統合的特質が反映されているのは、ごく自然な事象であると言える。そして遺文と『宝王論』を照合してみると、当時の儀礼仏教が調和の端緒を開く役割を果たしていたことを理解できるのである。今後は經典、教理書と儀軌、行儀書の連関を考察していく必要がある。それらの考察を積み重ねることによって、はじめて思想家としての飛錫の内的な撰述動機が浮かび上がってくると思われる。

〈キーワード〉 飛錫、代宗期、長安仏教界、『般舟讚』

（知恩院浄土宗学研究所研究助手）